

# 哲学教育、学びの道程としての現象学

—哲学的思考を育むために—

ウッペルタール大学退休正教授  
クラウス・ヘルト

京都大学名誉教授  
小川 侃

同志社女子大学  
佐藤 光友

## 1. はじめに

本稿は、新たな哲学教育のあり方を示唆することによって、生徒・学生が哲学的思考をどのように育むことができるのかを考察する。主体的・対話的で深い学びが叫ばれている学校教育（例えば、特別活動における「話し合い活動」、総合的な学習の時間、総合的な探究の時間など）においても、探究的な学習の基礎を司る哲学的思考の育成が重要な課題となってきた。

ここでは、小川 侃が、高名な現象学者クラウス・ヘルト<sup>1)</sup>を招いて、学生のために哲学授業（ポケットゼミ）を催したときの貴重な問答を手がかりとする。その問答から、私たちは何らかの哲学的思考のプロセスに気づかされる。昨今、巷にはいろんな現象学が流布しているが、学生と教師ヘルトとの対話から、事象自身に関わり、事象について語るということ、すなわち、事象そのものに立ち返って、現象しうる事象を捉え直すということが重要であることが理解できるであろう。

さらに、この哲学授業での学びの過程において、現象学的アプローチから新たな哲学カリキュラムの可能性が示唆されていることに私たちは気づかされるのである。

2に関しては主に、小川が担当し、3においては、クラウス・ヘルトの授業を概観し、1と4ならびに注に関しては主に、佐藤が担当しているが、共

著論文として、小川と佐藤が全体の内容を検討している。

## 2. 哲学的思考—事柄そのものへ

私（小川）は、ウッペルタール大学退休正教授で、ドイツ現象学会、会長を二期続けて務め、有名な『生き生きとした現在』<sup>2)</sup>及び『現象学の最前線』<sup>3)</sup>の著者である現象学者クラウス・ヘルトを2005年に京都大学の大学院人間・環境学研究科にお招きして3月から5月まで全部で10回の授業をしていただいた。週に講義と演習を各一回である。それとは独立に、私自身が編集共同翻訳して晃洋書房から出版したクラウス・ヘルト『現象学の最前線』を使用して新入生用のポケットゼミの授業を私は行った。

この書物は絶版になっているが、古代ギリシャ哲学から政治哲学、比較文化の哲学まで扱っている優れた講演論文集である。私の記憶では、私はその中の「数としての時間」をポケットゼミで扱ったと思う。このポケットゼミのプロトコールも保存してあるはずである。なにしろ2008年に京都大学を退任して、大学院人間・環境学研究科の小川教室を開け渡して以来、総ての書物と書類を運び込んだ石山の「小川現象学研究所無底庵」のどこかにあるはずである。残念ながらまだ整理がついていないので発見できないでいる。

ヘルトの京都滞在も終りが近づいた頃、私はポケットゼミの学生に次のように言った。「原著者のヘルト教授がいま京都大学に客員教授として教えておられるので一度来ていただいて質疑応答と対話を行いたい。」2005年5月、対話の結果が残っているので、この対話の中での哲学的思考を考察したい。私自身は哲学で最も重要なのは「文献ではなく、事柄そのものに帰ること」、若い人々との「対話をすることだ」と思っている。通訳は私が行った。

## 3. 哲学教育の最前線—クラウス・ヘルトとの対話

クラウス・ヘルトの著書『現象学の最前線』を読みかつ議論と解釈を行っているわけであるが、せつかくクラウス・ヘルトがいま人間・環境学研究科に客員教授として来洛されているので今日はクラウス・ヘルト教授を囲んで

コロキウムの時間を設けることにしたい。

## 第1の問い

クラウス・ヘルトは西洋古典文献学を副専攻として研究したと書かれている。それでは、日本の文学の歴史のなかでは、古典文学ではどのようなものを読まれたか。

### クラウス・ヘルト

私は紫式部の源氏物語、道元の正法眼蔵、とにかく「有る時」、井伏鱒二の黒い雨、三島由紀夫、哲学者では西田幾多郎、西谷啓治、和辻哲郎などを讀んだ。ほかには俳句が好きで芭蕉は讀んでいる。

## 第2の問い

私はカント、フッサール、ハイデッガーに関心をもっているが、それぞれの哲学者においてテキストをドイツ語で読むのと、日本語の訳で読むのとではどのような違いがあるのか。

### クラウス・ヘルト

今の三人のドイツの哲学者のテキストはそれぞれが少しずつ性格を異にするので一括して答えることはできない。

まずカントについていうと、彼のテキストはラテン語の影響を受けているので、ドイツ語としてはラテン語の思考がテキストのなかに入り込んでいる。カントのテキストはドイツ人の学生にとっても大変難しいものだ。

これに対して、フッサールのテキストは二種類に分かたれる。フッサールが自分で公刊したテキストは少し古いドイツ語であるが普通のドイツ語であり、それほど難しいものではない。これに対して、フッサールの研究草稿の方は、フッサールが公刊したわけではないからテキストの文章は十分に定式化されていないので分かりにくいし解釈しにくい。しかしカントもフッサールとともに哲学の教授の書く文章であり、無味乾燥で退屈な面がある。

これに対して、ハイデッガーは詩人のような言葉づかいと詩人の言葉で書くので、彼の言葉は非常に柔らかく柔軟である。従って人々を魅惑しつづけ

る。ただしこのことには裏面、暗黒面がある。つまり、ハイデッガーはそのテキストのなかで言葉遊びをやり、言葉で遊ぶという面がある。そのゆえにハイデッガーのテキストは非常に翻訳が困難である。ハイデッガーの『存在と時間』には日本語で8つの翻訳があるがこれは今述べたような事実に基づいている。

フッサールについてはフライブルク大学で多くの哲学の学生が講義に聴きに来てはすぐ脱落して少なくなってしまう。

それに対してハイデッガーの場合は、彼の弟子で且つ恋人でもあったハンナー・アレントが言っていることであるが、ハイデッガーのマルブルク講義は、多くの学生を魅了し、学生の間でうわさというか口コミがあり、マルブルクのハイデッガーの講義はすばらしい、マルブルクに行けという風に伝えられた。したがって、ハイデッガーは当時ドイツ哲学の隠れた王様であった。

### 第3の問い

先生は哲学の上での新しい発見や新しい発想を一体どのようにして得るのでしょうか。本やテキストを読んでいて少しずつテキストを変えていくのでしょうか。それとも突如、天啓のごとく閃くのでしょうか。

### クラウス・ヘルト

この問いに対しては、私はゲーテの言葉で答えたいと思う。もちろんゲーテはドイツ人にとってはエンパイアステートビルのごとき聳え立つ巨人であるのに対して私は小さい家なのであるから私は自分をゲーテに引きくらべる気持ちはまったくないのだが。

ゲーテは新しい発見や発想というのは、言い換えると、天才というのは95%の発汗と5%のインスピレーションから成り立っていると言う。それと同じように発見や発想の新しさというのはまずもって私が努力し、勤勉に働くから成り立つのである。たとえば、私はだいたいのところでの理解には満足しない。かならず更に問いかけ、問い直し、さらに問い出す。だから多くの努力をし、テキストを何度も読みなおす中で私に天啓のごときひらめきが起こる。もちろん総ては最終的には僥倖の問題でも有る。

つまり、幸運というのが働くのであって、幸運があれば私はなにかある閃きを得ることができる。同じテキストを読みながら1年後に再度読み返す時に同時に別のテキストを読んであれば両者の関連が発見できる。例えば、アリストテレスの「デ・アニマ」と「デ・カエロ」を一定の連関のもとに解釈できるようになるのは、幸運による。

#### 第4の問い

なぜ先生は哲学のなかでも現象学を研究し、しかも現象学者であり続ける意志をもつのか。

#### クラウス・ヘルト

なぜ現象学を哲学のなかでも重要な哲学と考えるようになったのか、という点については個人的な私的な事情もあるが、それは今語らないでおこう。それについては沈黙したい。しかし私が現象学者であり続けるということには多くの理由がある。あなたの問いには実に単純な仕方では答えることができる。

哲学には常に古代の哲学のはじまりから今に至るまで常に問いかけ常に考慮してきた事柄がある。それは「事柄そのものに帰れ、事象そのものに帰れ」という格率である。これは哲学をヘラクレイトス、パルメニデス、プラトン、アリストテレスから現代の哲学に至るまで規定している要求であり、この要求に現象学はもっとも適切に応答しようとしている。それは、事象自身に関わり、事象について語るということだ。

現象学はこの事象に帰れということをもっとも忠実に実行しようとしている。だから将来においても、他の哲学の学派が消滅しても現象学だけは存続し続けるであろうと思われる。

#### 第5の問い

化学の概念は物理学の概念によって基礎付けられる。それでは、哲学はどのような概念によって、どのようにして基礎づけられるのか。

## クラウス・ヘルト

物理学や化学においても時間、力、数などという概念は使われている。これらの概念が一体何を意味するのか、あるいは、知識、知ること、認識という概念について私はなにを理解しているのか。私の物理学についての理解には、前提となるものが有る。それは当たり前のこと、私が自己理解していること、私が分かり切っていると思っっていることが前提されている。この自明性、自己理解、自己理解していることが常に前提されている。

哲学はこの自己理解を常に問いただす。みなさんは今「数としての時間」という私の論文を読んでいるわけだが、時間を読むと言う時に時計を見ても実は時間を見るわけではない。時間そのものを見ることはできない。昔、アウグスチヌスというキリスト教の思想家は有名な言葉を残した。時間について問わなければ私は時間とはなにかはよく分かっている。よく自己理解している。しかし、もし時間とは何かと問われてそれに答えようとするとは何もわからなくなる、と。

このように哲学には二つの道がある。一つは、本を読んで文献研究をし、文献解釈するという道である。多くの哲学者は現在こういう仕事をしている。しかし、当たり前のことを問いだし、自明性そのものを問いつめると言うもう一つ別の道が哲学にはある。

このような問うこと、問いをもち問いを提出すると言う道は、哲学のもっとも古い道の一つであり、それはソクラテスの行く道だ。その意味ではカントが言ったことは今日でも正しい。哲学については数学を学ぶようには学ぶことができない。

哲学の歴史は学ぶことができるが、哲学についてはただ哲学することを学ぶことができるだけなのだ。

以上

## 4. 哲学教育一学びの道程としての「現象学」

「小川ゼミポケットコロキウム」での現象学者ヘルトの貴重なログスには、これからの教職課程において特に重視される哲学的思考の軌跡をみることができる。ここで、ポケットゼミでの質問者からの問いかけと、教師ヘルトの

返答を考察してみたい。

まずは、第1の問いでは、ヘルトは西洋の文献学を *Nebenfach* (副教科) として学生時代研究していたということであるが、東洋のしかも日本の源氏物語、道元、近代小説まで読んでいたということに驚かされる。質問した日本の学生にとっても、自らの読書の幅を広めなければならないと再認識したのではないだろうか。

次の第2の問いでは、同じドイツ語の文献でも、時代によって、また、哲学に対する認識の違いによって文体もさまざまであるということが学生にもよく理解できたのではないだろうか。特に同時代のフッサールとハイデガーのものでは、まったく異なるところがある。フッサールの草稿は、それ自体が現象学的記述によるものである。ハイデガーが詩人の使うような柔らかい文体を意識しているものとは違って、自らの意識し得るものをありありと記述しているフッサールの文体は読み手にとってはわかりにくいところがあるということがよく理解できた。文体の固い柔らかいということと、その内容が難しいやさしいこととは別であるが、親しみを持てるという意味では、ヘルトが述べているようにハイデガーのものがそうであろう。

また、第3の問いでは、哲学上の新しい発見や発想をどのように得るのかという学生の質問に対して、やはり、古典的テキストを徹底的に読み解き、問い直し問い返すことが必要であるということ述べており、学生たちにも基本的な文献の熟読が大切であるということが意識されたと思われる。

第4の問いでは、現象学が、現代においてもなお有力な哲学的思考の根源的なものとして存在している理由が、事象に徹底的に迫ろうとする、その哲学的意識にあるということである。「事象そのものへ」 *Zu den Sachen selbst* という現象学のモットーは、今、哲学教育が直面している「自ら考え問い直す」視点にとって、欠かすことのできないものではないだろうか。

このモットーは、哲学教育によって、日常慣れ親しんだ物や事の事象に立ち返り、その事象を何度でも見つめ直し、考え直せということであり、このことをこのコロキウムから読み取ることができるであろう。

最後に、第5の問いとして、物理学や化学といった、自然科学と哲学との基本的なスタンスの違いについての質問が学生から出た。これに対してヘルト先生は、哲学は自明性、すなわち自己理解といった、科学が前提としない、

日常性での当たり前の事象から出発しているということであった。哲学は、古典的な文献研究をすすめていくと同時に、日常性として自明的なことに目を向けることが哲学の研究には要請されているということである。

日常世界において、おぼろげながら表出されてくるものが「自らを与えるもの」*Sich—Geben* として、自らが受け入れることでしか哲学することはできないということ、そのことを私（佐藤）自身、ドイツと日本を代表する現象学者クラウス・ヘルトならびに小川 侃から教わることができ、高等教育・中等教育における哲学教育の重要性を現象学の視点から、あらためて自覚するに至った次第である。

## 注

- 1) クラウス・ヘルトは、1936年デュッセルドルフ生まれ。ドイツの哲学者であり、特にフッサールが創始した現象学を専門としている。ケルン大学において、博士号と大学教授資格を取得。その後アーヘン工科大学を経て、1974年からヴッペルタール大学にて教鞭をとる。現在は、同大学の大学退休正教授（日本の名誉教授にあたる）として活躍。哲学教育にも示唆を与える著書としては、本稿で引用しているもの以外のものを若干挙げておく。

*Husserls Phänomenologie, das Tor Philosophie des 20. Jahrhunderts, 1985/1986.*

クラウス・ヘルト『20世紀の扉を開いた哲学—フッサール現象学入門』  
浜渦辰二訳、九州大学出版会、2000年

*Treffpunkt Platon. Philosophischer Reiseführer durch die Länder des Mittelmeers. 1990*

クラウス・ヘルト『地中海哲学紀行（上）（下）』井上克人、國方栄二監訳、晃洋書房、1996年／1998年

- 2) *Lebendige Gegenwart. Die Frage nach der Seinsweise des transzendentalen Ich bei Edmund Husserl, entwickelt am Leitfaden der Zeitproblematik, 1966*

クラウス・ヘルト『生き生きした現在』新田義弘、小川侃、谷徹、斎藤慶典共訳、北斗出版、1988年

3) *Heraklit, Parmenides und der Anfang von Philosophie und Wissenschaft. Eine phänomenologische Besinnung, 1980.*

クラウス・ヘルト『現象学の最前線—古代ギリシア哲学・政治・世界と文化』小川侃編訳、晃洋書房、1994年